中１ギャップの克服に向けた小中連携の研究

― 中学校から見たとらえ方に焦点をあてて ―

学校力開発コース（12220919）　伊　藤　潤　一

小学校から中学校に進学する過程で，多くの児童生徒が生活環境や学習方法等にギャップを感じて不適応に陥る中１ギャップの問題が喫緊の課題となっている。中１ギャップの問題は小中学校にまたがった問題である。そこで，本研究では，県内の中学１年生や中学校教員を対象に行ったアンケート調査を基に，中学校から見た中１ギャップの実態に迫り，中１ギャップの克服に向けてどのような小中連携が有効なのかを明らかにする。

〔キーワード〕　中１ギャップ，小中連携，　意識のずれ

１　問題の所在と方法

(1)　問題の所在及び研究の背景

「中１ギャップ」とは，「小学校から中学校に大きく環境が変化する過程で，多くの児童生徒が生活環境，授業の形式や内容，学習の方法にギャップを感じ，不登校，いじめ，学習意欲の低下などの不適応現象を引き起こしている状況」（赤鹿，2009）のことである。平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」（文部科学省，2012）によると，不登校の児童生徒数は小学６年生で7.522名であるのに対し，中学１年生では21.895名と約３倍近く増加する。

筆者は，これまで中学校教員として，小中学校の指導方法や学習方法の違い，人間関係の変化など，小中間の段差に悩み，中１ギャップの状態に陥った生徒と毎年のように関わってきた。小中間の段差を特に問題とせずに乗り越える生徒も多い。だが，段差に不安や戸惑いを持つと学校への不適応を引き起こし，中１ギャップの状態に陥る生徒が現れる。中１ギャップは小中学校両方にまたがった問題である。これまで多くの小中学校が中１ギャップ克服に向けた小中連携の取り組みを行ってきた。その具体例として，中学校への体験入学や児童生徒の情報交換会，小中間の授業交流などがある。しかし，このような取り組みも，小中間の連携機会の少なさ，連携相手についての理解不足などにより有効に働いていない。

(2)　研究の目的と方法

本研究は，中学１年生や中学校教員を対象としたアンケートを基に，中１ギャップ克服に向けてどのような小中連携が有効なのかを明らかにすることが目的である。本研究では，中学校から見たとらえ方に焦点をあてる。結果の分析を通し，中１ギャップについての生徒と中学校教員の実態に迫り，今後の研究の方向性を検討する。

２　先行研究の検討

(1)　中１ギャップの研究

赤鹿（2009）は，小中連携・一貫教育のあり方を中心とした中１ギャップの研究を行っている。赤鹿は，この研究の中で，次の二点を指摘している。第一に，「カリキュラム・教育活動上の問題」「指導法上の違いの問題」「生徒指導をめぐる問題」の三つの問題が中１ギャップの大きな要因となっている点である。第二に，「中１ギャップの克服に向け，小中学校間の段差を低くして不安を解消する取り組みに加え，段差を乗り越える力を子ども自身に身につけさせ，段差を成長への弾みに変えていく『両にらみの連携・一貫教育』を行うことが重要である」点である。

赤鹿は，中１ギャップの特徴や要因について多くの資料文献を基に分析し，中１ギャップの研究をわかりやすくまとめている点では意義のあるものといえる。ただ，赤鹿の研究は，中１ギャップについて実態把握からの分析がなく，多くの資料文献を参照にした網羅的な研究にとどまっている。中１ギャップの研究を進めるには，児童生徒や小中学校教員対象のアンケート調査を基に，中１ギャップの実態把握を行うことが重要である。

(2)　中１ギャップにかかわる実態把握

宮崎県西都市の妻中学校区では，中１ギャップにかかわる児童生徒や教員の意識を把握するため

のアンケート調査を2007年に実施している。児童生徒の調査結果から，中学校入学前に不安だったこととして，「成績」「授業」「宿題」の割合が高く，主に学習面に強い不安を持っていたことが明らかになった。小中教員の調査結果からは，「生徒指導面を基盤とした教育」が小中連携で最も重視すべき観点と考えていることが明らかになった。

京都市では，小中連携教育についての実態を把握するため，京都市内の全小中学校教員を対象としたアンケート調査を2004年に実施している。調査結果から，小中教員とも現勤務校の小中連携は充実していないと感じていることが明らかになった。その理由として，「話し合いが十分になされていない」「相手校種の取り組みを理解していない」などが挙げられている。

宮崎県西都市の妻中学校区のアンケート調査からは，生徒が中学校入学前に感じていた不安要素や小中教員の小中連携の意識については具体的に把握できる。ただ，中学入学前に学習面に強い不安を持っている傾向を示した生徒の実態に対し，学習面からの中1ギャップの考察が十分になされていない。京都市のアンケート調査からは，小中教員の小中連携の意識については具体的に把握できるが，教員の視点からの分析や考察に限定されている。児童生徒と小中教員両方の視点からアンケート調査を実施し，実態把握を基に中1ギャップ克服のための小中連携の方策を考える必要がある。

3　実践と結果（明らかになったこと）

先行研究の検討を踏まえ，2012年11月から12月までの期間，山形県内の都市部にあるA中学校及び農村部にあるB中学校で，中学1年生と中学校教員を対象とした「中1ギャップや小中連携にかかわる実態を把握するためのアンケート調査」を行った。結果は以下の通りである。

(1) 中学1年生対象のアンケート結果について

対象者　・都市部にある山形県内A中学校（174人）
　　・農村部にある山形県内B中学校（52人）

No	質問	回　答	A中学校	B中学校
①	中学校入学前の意識	どちらかというと楽しみ	３９％	４４％
		どちらかというと不安	３７％	２９％
		どちらともいえない	２４％	２７％
②	中学校生活で楽しみだったこと（複数回答）	学習する内容	３２人	４人
		友だち関係	９７人	４２人
		部活動	１２７人	４０人
		学校行事	９８人	４０人
③	中学校生活で不安だったこと（複数回答）	学習する内容	１０２人	３８人
		成績	１２４人	４４人
		友だち関係	７１人	１２人
		先輩との関係	７２人	２２人
④	現在の中学校生活は楽しいですか	楽しい	４５％	５９％
		どちらかというと楽しい	４０％	３５％
		どちらかというと楽しくない	１２％	６％
		楽しくない	３％	０％
⑤	中学校生活が楽しいと感じている理由　1）	信頼できる友だちがいるから	６１人	２２人
		部活動が楽しいから	３９人	９人
⑥	中学校生活が楽しくないと感じている理由　2）	信頼できる友だちがいないから	２人	２人
		授業があまりわからないから	６人	１人
		宿題が多いから	５人	０人

(2) 中学校教員対象のアンケート結果について

対象者　・都市部にある山形県内A中学校（31人）
　　・農村部にある山形県内B中学校（18人）

No	質問	回　答	A中学校	B中学校
①	中1ギャップ克服のために小中連携は必要か	必要だと思う	100 ％	９４％
		必要だと思わない	０％	６％
②	中1ギャップに陥った生徒の指導支援の方策	・日常的な生徒の様子観察 ・面談・教育相談・カウンセリング ・生徒の人間関係づくりのサポートのためのスキル学習やエンカウンター　等		
③	中1ギャップ克服に向けた小中連携の取り組みで重視すべき観点	学力の定着や互いの授業の工夫改善	１３％	１２％
		生徒の豊かな人間性の育成	３０％	１８％
		生徒指導上の児童生徒の深い理解	２０％	２８％
④	現勤務校の小中連携の充実度	充実している	０％	１７％
		どちらかというと充実している	２６％	３３％
		どちらかというと充実していない	５５％	４４％

		充実していない	１９％	６％
⑤	現勤務校の小中連携が充実していない理由　３）	小学校の取り組みを把握できてない	１０人	２人
		小中連携の意義が共通理解できていない	９人	１人
⑥	連携相手の小学校の取り組みについて知りたい情報	子どもの学力の実態や学習指導方法	１９％	１６％
		児童生徒の生徒指導についての実態	４３％	６６％
⑦	小中連携の課題	話し合う回数や時間があまりない	４２％	５０％
		小中間の指導方法にずれがある。	２９％	３１％

(3)アンケート調査より明らかになったこと

中１対象のアンケートから，次の三点が明らかになった。

第一に，中学校入学前に学習面に不安を持っていた生徒が多い点である。それは，③の質問でＡ・Ｂ中学校ともに「学習する内容」「成績」を選んだ人数が多いことからわかる。特にＢ中学校は，②の質問で「学習する内容」を選んだ人数が４人と極端に少なく，③の質問でも「学習する内容」は38人（Ｂ中全体の73%），「成績」は44人（Ｂ中全体の85%）と高い割合を示した。

第二に，Ａ中学校の方がＢ中学校に比べ，「友だち関係」に強い不安を感じていた点である。それは，③の質問で「友だち関係」を選んだ人数が 71人（Ａ中全体の41%）と多いことからわかる。③の質問で「先輩との関係」と回答した人数は，Ａ・Ｂ中学校とも多く，割合は40%台でほとんど差がないことがわかった。

第三に，中学校生活を楽しく送っている生徒が多い点である。それは，④の質問で「楽しい」「どちらかというと楽しい」のどちらかを選んだ割合がＡ・Ｂ中学校とも八割以上を占めていることからわかる。⑤の質問では信頼できる友だちの存在や部活動を選んでいる人数が多かった。ただ，⑥の質問で「授業があまりわからないから」「宿題が多いから」を選んでいる生徒がおり，中学校入学後も学習面に不安やギャップを持っていることがわかった。

中学校教員対象のアンケートから，次の二点が明らかになった。

第一に，「生徒理解・生徒指導面」を重視した指導を行っている教員が多い点である。それは，Ａ・Ｂ中学校とも，②の質問で「生徒理解・生徒指導面」を重視する記述が最も多いことや③の質問で「生徒の豊かな人間性の育成」「生徒指導上の児童生徒の深い理解」の回答の割合が上位を占めていること，⑥の質問で「児童生徒の生徒指導についての実態」が最も高い割合であることからわかる。一方，③の質問で「学力の定着や互いの授業の工夫改善」を，⑥の質問で「子どもの学力の実態や学習指導方法」を選んだ割合はＡ・Ｂ中学校とも10%台にとどまり，学習面の取り組みや情報があまり重視されていないことがわかった。

第二に，現勤務校の小中連携は充実していないと感じている教員が多い点である。それは，④の質問で「どちらかというと充実していない」「充実していない」のどちらかを回答した割合が，Ａ・Ｂ中学校とも五割以上と高いことからわかる。特にＡ中学校では，⑤の質問で「小学校の取り組みを把握できていない」が10人，「小中連携の意義が共通理解できていない」が９人と多く，小中連携が充実していないという認識をより強く持っていることがわかった。⑦の質問では「話し合う回数や時間がない」「小中間の指導方法にずれがある」を選んだ教員の割合もＡ・Ｂ中学校ともに高いことがわかった。

４　考察

アンケート調査より明らかになったことについて，次の三点に整理して考察する。

第一に，中１ギャップについての生徒と中学校教員との「意識のずれ」である。生徒は，中学校入学前から学習面に強い不安を感じながら学校生活を送っている。一方で中学校教員は，学習面よりも生徒指導・生徒理解面を重視した指導を行っている。中学校教員がそのような指導に重点をおくのは，中学校がかつて荒れた経験を踏まえ，「生徒指導が中学生指導の基盤。その基盤を確立させてから学習指導」と考える学校文化が存在しているからである。また，多くの教員が，生徒を日常的に観察する中で，人間関係づくりの困難さが中１ギャップに陥る主な要素と認識し，生徒理解に重点的に努めてきたからである。ただ，中１対象のアンケート調査からは，生徒たちにとって学習面での不安やギャップが最も大きいことが明らかになってきた。このような生徒の実態を考えれば，

中学校教員は中１ギャップの克服に向け，学習指導をより重視した小中連携の方策を考えていく必要がある。また，Ｂ中学校の生徒の方がＡ中学校に比べ，中学校入学前に学習面により強い不安を感じていた点については，その理由を明らかにするため，Ｂ中学校の生徒を対象とした再アンケートの実施と分析が必要である。

第二に，Ａ中学校の生徒の方がＢ中学校に比べ，中学入学前に友だち関係により強い不安を感じていた点である。その理由として，複数の小学校から複数の中学校に入学する都市部の事情が考えられる。農村部のＢ中学校にも複数の小学校から入学するが，彼らはスポーツ少年団活動や地域行事などの交流を通し，小学校時代から互いに顔見知りであることが多い。そのため，Ｂ中学校の生徒は，中学校入学前の友だち関係の不安は少なかったと考えられる。一方，中学校入学前に「先輩との関係」が不安だったと回答した割合がＡ・Ｂ中学校とも高い点については，学校の違いに関係なく，小学校とは違う先輩との上下関係に不安を持っていたことが考えられる。

第三に，現勤務校の小中連携は充実していないと感じている中学校教員が多い点である。特にＡ中学校の方にその傾向が強い。このことから，複数の小学校から複数の中学校に入学する都市部の方が小中連携体制の構築が難しいと考えられる。また，小中間に指導方法にずれがあると考えている中学校教員が多い点については，筆者自身が体験した具体的事例を挙げる。中１ギャップの状態に陥った生徒について協議を行った際，小学校側は「小学校の時は問題なかった。中学校でもっと丁寧に指導してくれればこんな状態にはならなかった。」と主張した。それに対し，中学校側は「小学校の時から不登校に陥る要因はあった。小学校時代に学習の基礎基本や社会性をきちんと身につけさせなかったことが原因。」と反論した。ここから小中教員の相互批判に至ってしまった。この事例は，小中連携の機会が少ない現状から，指導方法や学校文化についての小中相互の理解が不足していたことを示している。小中の教員は，中１ギャップ克服に向けた小中連携を行うにあたり，小中相互の指導方法や学校文化について真摯に理解し合うことが重要である。そのための手立てとして，小中が連携する機会を多く確保し，小中の合同研修や交流活動を密接に行っていく必要がある。

５　到達点と課題

本研究における到達点を二つ挙げる。

第一に，中１ギャップに関して生徒と中学校教員との間に意識のずれがあることが明らかになったことである。学習面での不安やギャップを強く感じている生徒の実態を考えると，学習指導をより重視した小中連携が有効である。

第二に，現勤務校の小中連携が充実していないと感じたり，小中学校の教員間に指導のずれがあると考えている中学校教員が多いことが明らかになったことである。その手立てとして，小中の合同研修や交流活動を密接に行いながら，小中教員間の相互理解を図る小中連携が有効である。

この到達点を踏まえ，今後の課題を二つ挙げる。

第一に，本研究では中学校から見た中１ギャップに焦点を当てたが，今後は小学校教員を対象としたアンケート調査を実施し，小学校から見た中１ギャップのとらえ方についても研究を進めたい。

第二に，筆者の勤務する中学校区の共通理解の下，中１ギャップ克服に向けた小中連携プログラムを具体的に検討し，実践していきたい。

注

1) 中１対象アンケートの質問④で，「楽しい」「どちらかというと楽しい」を回答したＡ中（148人），Ｂ中（49人）の中の人数
2) 中１対象アンケートの質問④で，「どちらかというと楽しくない」「楽しくない」を回答したＡ中（26人），Ｂ中（3人）の中の人数
3) 中学校教員対象アンケートの質問④で，「どちらかというと充実していない」「充実していない」を回答したＡ中（23人），Ｂ中（9人）の中の人数

引用・参考文献

赤鹿弘和:『中１ギャップに関する研究 -小中連携一貫教育のあり方を中心にして-』, pp. 4-50, 2009
京都市総合教育センター:『小中連携教育の在り方 -アンケート調査を通して探る連携を充実させるための条件-』, pp. 4-19, 2004
宮崎県西都市立妻南小学校:『中１ギャップの克服を目指した小・中学校の連携のあり方 -小・中学校の交流を通して』, pp. 7-13, 2007
文部科学省:『平成23年度児童生徒の問題行動等の諸問題に関する調査』, 2012